

〔目的〕 加工食品やそれに伴う軟食化は咀嚼機能の低下をもたらし、これが口腔内の3大疾患（齲蝕，歯周疾患，不正咬合）の増加の直接及び間接的な原因の一つと推測されている。しかし、咀嚼に関しては比較すべき過去のデータが必ずしも十分でない。従って、軟食化が本当に咀嚼機能の低下と密接な関係があり、ひいては、これらの3大疾患とどの程度関連があるかどうか今のところ明らかでない。そこで、本研究ではこれらの基礎的なデータを揃える必要があると考え、咀嚼に関する2,3の機能を測定した。

〔方法〕 女子大生（19～22歳）121名を対象に以下の3つの咀嚼機能を測定した。

1. 咀嚼能力：チューインガムを用いて、①普通に咀嚼した場合、②一所懸命に咀嚼した場合のそれぞれ1分間の溶出糖量を測定した。
2. 咬合力：第1大臼歯の咬合面に咬合力計を装着し、最大咬合力を測定した。
3. 咬合接触面積：圧力測定用フィルムを奥歯に力を入れて噛ませ、発色した面積をイメージスキャナーで測定した。

〔結果〕 咀嚼能力（平均溶出糖量g(%)）は普通咀嚼1.07g（34.1%），一所懸命咀嚼1.16g（36.6%）であった。咬合力は36kgで河村（30kg），小西（33.1kg）の値に近く，銭場ら（22.6kg）の値より高かった。咬合接触面積は58.4mm²であった。咀嚼能力（一所懸命）と咬合接触面積の間には $r=0.24$ （ $p<0.01$ ），咬合接触面積と咬合力の間には $r=0.32$ （ $p<0.01$ ），咀嚼能力と咬合力の間には $r=0.27$ （ $p<0.01$ ）で、それぞれ低いながらも多少の相関関係が認められた。